

【特別講演】

『AI時代に求められる臨床検査技師像とは？ ～サイエンスとアートを兼備した臨床検査士へ～』

岩手医科大学医学部臨床検査医学講座 教授 諏訪部 章 先生

2017年5月20日、最強将棋プログラムの「ポナンザ」が、佐藤天彦名人を破るという衝撃のニュースが流れた。これでプロ棋士は不要になるのではという危機感が将棋界に広がった。人工知能（AI）やロボットの進化と普及は目覚ましく、医療分野への応用が加速しており、これは臨床検査領域も例外ではない。日々の分析業務はもとより、機器のメンテナンスや精度管理までもAIやロボットが担当し、人間でしかできない考えられてきた採血や生理検査までもロボットが行う時代が到来するかもしれない。臨床検査技師もその役目は終わってしまうのだろうか。

こうした議論は最近始まったことではなく、臨床検査の自動化や搬送が急激に発展・普及した1990年代にも同様の危機感があった。ランチやFMSなど臨床検査のアウトソーシングが加速し、特に検体部門では「自前検査室の不要論」が唱えられ、病院検査室は危機的状況に陥った。しかし、最近では病院検査室の存在意義が問われることはなく、むしろ益々その重要性が高まっている感さえある。これは、検査結果の迅速報告体制の確立、ICTやNSTをはじめとするチーム医療の積極的実践など、臨床検査のアウトソーシングではなしえない検査サービスの提供に尽力した先人たちの努力の賜と言えるかもしれない。

最近は大変な日本ブームであるが、その人気の理由は決してハイテク日本ではなく、日本の伝統や匠の技などにあることに驚かされる。コンピュータ将棋が名人を下しても、プロ棋士はなくなるどころか、将棋人気はむしろ益々加速している。人と人との勝負の駆け引き、勝者の喜びと敗者の悔しさがおりなす人間模様に人々が感動するからではないだろうか。AIやロボットにはないアナログの良さが脚光を浴びている。

こうした状況を踏まえると、医療が高度化し専門化（デジタル化＝サイエンス）すればするほど、病める患者への十分な説明や心のケア（アナログ化＝アート）が必要になる。忙しい医療現場では、医師から十分な病状や検査結果に関する説明が聞けず不満を抱く患者が、採血室や生理検査室で臨床検査技師に愚痴をこぼすことがよく見受けられる。こうした状況で、臨床検査技師が患者に寄り添い、十分な説明をし、悩みや愚痴を聞いてあげれば患者はどれほど満足し感謝するか計り知れない。

これまでの臨床検査技師の業務は、自分の生み出した検査結果を臨床側に提供すること（＝サイエンスの実践）が中心であった。しかし、今後は、チーム医療の充実、検査結果の説明・相談の実践、病棟業務や在宅医療への参入など、より多くの患者に接する機会を得、臨床検査を介して患者に寄り添うこと（＝アートの実現）により、患者から感謝の言葉をいただく機会が倍増することであろう。サイエンス（臨床検査技師）だけでなくアートを兼備した臨床検査士へパラダイムシフトすることが、AI時代に望まれる臨床検査技師像ではないだろうか。